



# 漱石の『ハムレット』受容：『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

芦津, かおり

---

**(Citation)**

神戸大学文学部紀要, 43:17-33

**(Issue Date)**

2016-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCDOI)**

<https://doi.org/10.24546/81009427>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009427>



# 漱石の『ハムレット』受容——『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

芦 津 かおり

はじめに

夏目漱石がシェイクスピア作品から多大なる影響を受けたことは周知の事実である。彼の『ハムレット』受容を語る際には、オフィーリアへの言及の多い『草枕』（1906）がもっぱら引き合いに出されるが、その直前に書かれた『吾輩は猫である』（1905-6；以下『猫』と略）が取り上げられることはほとんどない。しかし、漱石が『猫』と『草枕』を立てつづけに執筆したという事実や、二作間の主題的な共通点を踏まえたとき、『草枕』と同じく『猫』においても『ハムレット』が何らかの重要な意味と役割を有していると推論することは可能であろう。本稿では『猫』と『ハムレット』をつなぐ補助線として二つの「溺死」に着目しながら、『猫』執筆当時の漱石の心象風景や想像力の回路を探る。そして『猫』テキストのなかにひそむ、『ハムレット』からの隠微でとらえがたい影響の跡をたどってみたい。

『草枕』は、山奥の桃源郷のような場所を舞台に、主人公の画工が旅先で出会った美女の画を描くことをめぐって展開される物語である。筋らしい筋のない緩やかな展開のなか、画工の口をかりて漱石の東西比較文化論・詩論がふんだんに繰り広げられる。小説の序盤、茶屋に立ち寄った画工は、かつて淵川に身を投げて死んだ長良の乙女の話を目にする。その話は彼の想像力を、悲劇『ハ

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

ムレット』のオフィーリア、さらに逗留する旅館の美女・那美へと駆り立ててゆく。小説のなかでは『ハムレット』のオフィーリア、とりわけ画家ミレーによる「オフエリヤ」の絵が何度も言及されるばかりか、狂気の女性の入水自殺が重要なモチーフとして現れることから、漱石が執筆時に『ハムレット』を念頭に置いていたことは間違いないとされる。

一方の『猫』は語り手の猫「吾輩」の視点から、漱石をモデルとする主人・珍野苦沙弥とその周囲の知識人ら（「太平の逸民」）の生きざまや、彼らのたたかわす議論などが面白おかしく語りだされる長編の風刺文学である。一見したところ、形式面でも筋の上でも『草枕』と共通点があるとは思われない。しかし、『猫』最終章に色濃く現れる文明批評——とくに欧化された社会の生き難さ、西洋近代の引き起こす自我肥大の問題、さらに東洋・日本文化への回帰など——は『草枕』で頻出する東西文化論や二十世紀文明への反発に通じるところも少なくなく、その意味では『草枕』と主題的なつながりが認められる。平川祐弘も、漱石が『猫』最終話の脱稿後、半月も経たぬうちに『草枕』を書きはじめ、二週間足らずで完成させたという事実に着目し、そのような矢継ぎ早の執筆は「その当時（つまり『猫』終盤を執筆していた頃）の漱石の念頭に溜まっていた感想を一時に『草枕』の中へ吐き出した」（350）からだとして、二作間の連続性を訴える。

平川の説が正しいとすると、『草枕』の序盤からすでに顕著な『ハムレット』的テーマ、とくにオフィーリアの溺死のモチーフもまた、『猫』から流れ出てきたものと考えられる。実際のところ、『猫』テキストにもいわば二つの「溺死体」が漂っており、それらは各々が異なる形で『ハムレット』と関連しているように思われる。以下では、二つの「溺死」を検証し、それらが漱石の想像力のなかで『ハムレット』とリンクしながら『猫』テキストを生成する力として作用している可能性を探りたい。

## 一) 藤村操の溺死

ほとんどの読者は読み飛ばしてしまうことだろうが、『猫』における一つ目の「溺死」は、藤村操の投身自殺への二度の言及である。有名な事件ではあるが、以下にその概略を述べておく。1903年5月、まだ17歳にもならぬ一高生・藤村青年は、大樹を削って書きつけた遺書「巖頭の感」において人生の「不可解」を嘆き、華巖の滝へと身を投じた<sup>1</sup>。この事件は「少年哲学者」の死として新聞に大きく取り上げられたばかりか、論壇での盛んな議論を呼ぶなど、社会的にも大反響をもたらした。藤村をまねて現場で自殺を試みた者が四年間で185人以上(未遂も含む)に上ったというデータも残っているほどである(平岩、38)。漱石にとってもまた、この事件は格別にショッキングなものだった。というのも当時、一高で教鞭を取っていた漱石は、ちょうど事件の数日前に、宿題をしてこなかった藤村を教室できびしく叱責しており、それが自殺の引き金になったのではないかと心配したのである<sup>2</sup>。漱石がこの死を題材にした短詩を書いたり(1903)、『猫』や『草枕』でもくりかえし事件に言及したりしていることから、漱石のショックのほどがうかがい知れる。

話を『猫』に戻そう。この藤村の身投げが二度話題に上る。十章で、苦沙弥が中学校で担任をしている男子学生・古井武右衛門(十七、八歳と描写される)がとつぜん苦沙弥のもとを訪ねてくる。この学生は、ハイカラな娘をからかってやろうという友人の悪戯に乗せられて、でっち上げの艶書に名前を貸してしまったのだが、そのために退学処分にならないだろうかと気に病んで相談にきたのである。冷淡な反応しか示さぬ苦沙弥とは違い、語り手の猫は青年に同情を示し、「可哀想に。打ちやつて置くと巖頭の吟でも書いて華巖滝から飛び込

1 「巖頭の感」は次のような内容であった。「悠々たる哉天壤、遶々たる哉古今、五尺の小軀を以て 此大をはからむとす、ホレーショの哲學竟に何等のオーソリチーを價するものぞ、萬有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし、始めて知る、大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを」(『萬朝報』より)。

2 事件が報じられた後、漱石は教壇へ上るなり、最前列の生徒に小声で藤村の自殺の理由を尋ねた。そして「先生、心配ありません、大丈夫です」という生徒の返答に「心配ないことがあるものか。死んだんぢやないか」と答えたという(伊藤、148)。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

むかも知れない」(471)と語る。たまたまその場に居合わせた寒月も「あの容子ぢや華厳の滝へ出掛けますよ」(475)と青年を藤村になぞらえる<sup>3</sup>。

『猫』における『ハムレット』の影響を考えるにあたってこの投身自殺が意味をもつのは、藤村操が『ハムレット』およびハムレット王子と切っても切れない関係にあるからだ。一つには、藤村が死ぬ直前にこの悲劇を読んでおり、彼の遺書が劇への言及——「ホレーショの哲学竟に何等のオーソリチーを價するものぞ」という一文——を含んでいたことである。事件直後には、この「ホレーショ」なる哲学者が何者であるかということをめぐる議論も交わされたようだが、現在ではそれが『ハムレット』に登場する、王子の親友のホレイシヨであるということで見解が一致している。一幕五場で亡霊に遭遇したハムレットはホレイシヨに“*There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt of in your philosophy*”「ホレイシヨ、天と地のあいだには哲学などでは思いもよらぬことがあるんだ」(1.5.174-5)と述べる。この“*your*”はとくに訳出を必要としない一般的な意味のものだが<sup>4</sup>、藤村はそれを「ホレーショの」という意味に誤解したことから、このような表現が出てきたと考えられている。詳細はさておくとしても、要するに藤村は自身の遺言において、哲学では説明しきれない謎や悩みに苦しむハムレットに自分を重ね合わせながら、人生に対する懷疑や嫌悪、煩悶、自殺願望を表明したわけである。藤村の親友であった藤原正はその意図を理解していた。だからこそ彼は、藤村の死から一ヶ月の後に出版された『第一高等学校校友会雑誌』で「君に別れ、血に泣きて、ホレーショの悲劇を演じ、悲泣雨涙、空しく華厳の巖角を撃つて、憾を飛瀑の遺響に託せむとは」(128号:82)と、友をハムレット王子に、

3 越智によれば、この男子学生のエピソードで諷刺されているのは「苦沙弥の冷淡さ」(65)であり、その意味において漱石は、教師としての自分の藤村への態度にある種の罪悪感を抱いていたという見方も可能であろう。『草枕』における、藤村の死に対する同情的な書き方の中にも、そうした漱石の心情を読み取ることはできるかもしれない。

4 *The Arden Shakespeare* の注にも“not some particular philosophy of Horatio's but philosophy in general, *your* being used in the indefinite sense then common.”とある。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

自らを王子の死を見届けるホレイショ役になぞらえながら、その死を悼んでいる。やはり藤村の近い友であった安倍能成も「当時藤村は…シェクスピアの『ハムレット』を読み、ハムレットの煩悶が、友人ホレーショの空なる哲学的談義によって救はれる由もないことを知つて、この言を成したもの」(342)と回顧し、友をハムレット王子と重ねる<sup>5</sup>。もちろん、シェイクスピアへの造詣が深く、『ハムレット』の講義までしていた漱石なら、藤村が悲劇『ハムレット』の登場人物に言及しながら、ハムレット的煩悶を表現していたことを瞬時に見てとったことであろう<sup>6</sup>。

藤村青年と『ハムレット』/ハムレットのあいだの、こうした強い関連性や連想については、彼の近辺だけではなく新聞や論壇においても認識されていた。藤村の自殺から一ヵ月後に行われた「藤村操の死に就いて」という講演のなかで黒岩涙香は、ホレイショが『ハムレット』劇のキャラクターであることを指摘している(平岩、56)<sup>7</sup>。自殺の原因として失恋説も囁かれたが、当時の新聞や論壇はむしろ「哲学的懷疑」や「近代的自我の煩悶」といった精神的・思想的な側面を強調した。この事件をきっかけに雑誌『太陽』では自殺の是非をめぐる論争のようなものも巻き起こり、『太陽』9巻9号(1904)では坪内逍遙が「自殺是非」と題する長文のなかで「軽々しく自殺を実行したるは単にその意志の薄弱なるを証するに外ならざるをや」(68)と批判したのに対して、姉崎正治は「現時青年の苦悶について」で「青年の苦悶は決して知識の問題でない、生活意志の問題である、巖頭の感は実に立派に此のTo be or not to beの意志問題から湧き出た懷疑と其の懷疑の遂行動機とをいひ表しておるではないか」(87)と、ハムレット第四独白の文句を三度も引用しながら藤村を

5 東大の教師であったケーベル博士も、当時学生たちに「藤村の問題は“to be, or not to be”だ」と語ったという(伊藤、152-3)

6 明治37、38年頃(1904、5年頃)に漱石が残した『ハムレット』についての詳細な記述(断片18)もまた、彼が劇に精通していたことの証左となる(「断片」、138-43)。

7 ただし涙香は「ホレーショは、…今では似非非哲学者の代名詞の如く使われる名前となつている」と誤った記述をしている。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

擁護する<sup>8</sup>。ハムレット王子の名こそ出ないものの、姉崎が藤村にハムレット王子を重ね合わせているのは明らかである<sup>9</sup>。Yasunari Takahashiは、『新体詩抄』(1882)の出版以来、ハムレット王子が日本のインテリや文学青年のあいだで「近代的自我」の体現者として、また孤独で繊細、懐疑的な反体制のシンボルとして多大な影響を放っていたことを指摘し、その影響の延長線上に北村透谷や藤村の死を位置づけている(105)。そうした思想的・文化的な空気の中なかでは、藤村操の苦悩や厭世観、哲学的懐疑がハムレット王子とそれらと重ね合わせられ、「藤村=日本のハムレット王子」という図式が生まれたのも不思議はない<sup>10</sup>。

『猫』執筆時の1905-6年といえば、藤村の死からまだ日も浅く、その死をめぐる記事や論説がいたるところ(漱石が目を通したであろう、上述の『太陽』や一高の校友会誌も含む)に発表されていた時期である。個人的な関わりからも、さらに思想言論上の観点からも、藤村の死に並々ならぬ関心をもっていた漱石の心のなかで、この事件が喚起する煩悶、懐疑や印象は、『ハムレット』の喚起するイメージや問いかけと重なりあい、響きあいつつ彼の想像力をつよく掻きたてたことであろう。そして、おそらくは『猫』での藤村への言及をきっかけに、藤村的=ハムレット的な煩悶や懐疑が漱石の心を強く支配しはじめたのではないかと考えられる。そのことは、十章あたりを境に『猫』がその調子と諷刺の矛先をガラリと変えることにも表れている。藤村への言及をふくむ艶書事件のエピソード自体はコミカルに描写されるものの、それを最後に、これ

8 姉崎は「「我れ」を形式の中に压抑しようとして来た」日本社会において、西洋文明の影響をうけた青年が、「「我れ」を求め人生問題に頭を入れ始め」て自殺してしまったことは自然の理であり、藤村の死は、彼を守りきれなかった「社会と教育の罪」であると主張した。

9 ちなみに漱石は、イギリス留学中も『太陽』を毎月きっちり日本から送らせていたくらいであるから、日本帰国後も同誌のこうした論壇記事にしっかり目を通していただろう。

10 Takahashiも藤村が“a bit of a Hamlet-figure”になったと指摘する。藤村をハムレット王子となぞらえる見方は、たとえば、この事件を題材に書かれた推理小説『日本のハムレットの秘密』(1979)などにも活用されている。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

まで展開されてきた軽妙な人間諷刺は鳴りをひそめる一方、西洋や近代社会の痛烈な批判がつつぎと繰り出され、そこに人生問題に関わる『ハムレット』のモチーフが頻繁に織り込まれてゆくからである。

とくに最終章・十一章では、苦沙弥邸に集まる人々の言葉に厭世的な空気が充満する。「とにかく此勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」(535)という苦沙弥は、

死ぬ事は苦しい、然し死ぬ事が出来なければ猶苦しい。神経衰弱の国民には生きて居る事が死よりも甚しき苦痛である。従つて死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうと心配するのである。(537)

といった具合に、生死の問題や自殺を論じる。周囲の者たちも負けず劣らず悲観的に「自殺学」や「自殺クラブ」について長々と語る。周知のように、シェイクスピアのデンマーク王子は登場するなり、自殺願望（“O that this too too solid flesh would melt, . . .”; 1.2.129）とはげしい厭世観（“How weary, stale, flat, and unprofitable / Seem to me all the uses of this world!”; 1. 2. 133-34）を口にする。さらには、やるかたない憂鬱を友人に告白したかと思えば（“I have of late, but wherefore I know not, lost all my mirth, forgone all custom of exercises”; 2.2.295-6）、有名な第四独白（“To be, or not to be…”; 3.1.56-90）では人生における多くの災難や苦しみを列挙しながら、それにもかかわらずなぜ自殺しないのかをえんえん論じる。苦沙弥ら「太平の逸民」たちが展開する、筋の通っているようで屁理屈とも聞こえる自殺論や厭世観は、ハムレット王子の煩悶や思索を想起させつつ、あえてそれらを滑稽にずらしたパロディのようにさえ読めてくるのである。

また、苦沙弥邸に集う「太平の逸民」たちは、西洋化に伴う自我や個性の肥大を「文明の呪詛」(532)として厳しく糾弾する。この「近代的自我」の問題

は、漱石が当時執筆した「断片」にも頻出するばかりか、その後長きにわたって彼を悩ませつづけた<sup>11</sup>。『猫』十一章でも、近代の人間の「自覚心」が肥大し、個性が発展するにつけ人間は生き辛くなったという議論が長々と展開される。近代の人間の「自覚心なるものは文明が進むにしたがって一日一日と鋭敏になって行くから、仕舞には一挙手一投足も自然天然とは出来ない様にな」(苦沙弥; 531)り、「二六時中己れと云ふ意識を以て充滿して居る」(独仙; 532)というのだが、そんな自意識にがんじがらめになった近代人の例として、もっともふさわしい人物は誰か? もちろんハムレットをにおいて他にはあるまい。批評家Harold Bloomが“the Western hero of consciousness”(409), “the hero of interiorization”(410)と名づけるように、彼は執拗に自分自身の心の中を凝視し、多くの独白で自分の内なる意識・思索を分析しつづけ、そんな自分にごんじがらめになって行動できなくなる。そして実のところ、上述のように二十世紀終盤の日本の知識人のあいだではハムレット(とりわけ彼の第四独白)こそが「近代的自我」のシンボルとして崇拝されていたことを考え合わせれば、漱石がそうした過剰な自覚心や自意識に苦しむ近代人を批判する際に、ハムレット王子のことを念頭においていたとしても不思議はない。ひょっとすると漱石はそこに、同時代の日本人たちの安直なハムレット崇拝に対する諷刺をも混ぜ込んでいたのかもしれない。とはいえ、留学以来みずからも文明社会の生きづらさや、肥大した自我の重さ、その結果として起こる神経衰弱を体験していた彼にとって、それは単なる他人事として片付けられるものではなかったであろう<sup>12</sup>。『文学論』序文にも自身が「ただ神経衰弱にして狂人なるが為め、「猫」を草し…」(14)と記した漱石であればこそ、藤村やハムレットなど、自意識過剰の病め

11 明治 38、9 年に書かれた「断片」には、たとえば「self-consciousness の結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は二十世紀の共有病なり」(294)「今人について尤も注意すべき事は自覚心が強過ぎる事なり」(212)といった記述がある。漱石は明治 44 年に行った演説「私の個人主義」(明治 44 年)においても、同様の問題を考えている。そうした思索が後に彼を「則天去私」の境地へと導くことになるのだろう。

12 平川も、漱石が自分自身のロンドン留学体験を近代文明の弊害として一般化し、拡大解釈したのではないかと考える(350)。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

るインテリ青年の系譜に自分自身をも重ねていたのかもしれない。

以上、二十世紀初頭の日本の知識人や文学関係者にとって藤村操とハムレット王子とが分ちがたく結び付いていたこと、さらに藤村の死に言及したあたりから『猫』テキストにハムレット的な問題群——厭世や懐疑に満ちた哲学的思索や自殺願望など——が充満することを示し、『ハムレット』への直接的言及はなくとも、同悲劇が『猫』を執筆する漱石の意識の根底に横たわり、テキスト終盤の内容とトーンに多少なりとも影響を与えた可能性を示唆した。そして、『猫』最終章の結末でもう一つの「水死体」が上がる時、『ハムレット』はより具体的なモチーフとして浮上し、『草枕』へと流れ込んでゆくことになる。

## 二) 猫の溺死

二つ目の溺死体は誰のものか？こちらは読者の誰しもが気づくものである。すなわち、結末で猫自身が語る、「吾輩」の溺死である。好奇心からビールを飲み、歌ったり踊ったりしたくなるほど酩酊した猫は、誤って甕に落ちてしまう。

我に帰つたときは水の上に浮いてゐる。苦しいから爪でもつて矢鱈に搔いたが、搔けるものは水ばかりで、搔くとすぐもぐつて仕舞ふ。仕方がないから後足で飛び上つておいて、前足で搔いたら、がりゝと音がして僅かに手応があつた。漸く頭丈浮くからどこだらうと見廻はすと、吾輩は大きな甕の中に落ちて居る。(566-67)

この溺死のモデルとして知られるのは、英国詩人トマス・グレイの詩「お気に入り猫の死に寄せるオード」(Thomas Gray, "Ode on the Death of a Favourite Cat"; 1747)の中の猫である<sup>13</sup>。たしかに、猫が鉢のなかに落ちて溺

13 当時流行した「擬英雄詩」(mock-heroic)スタイルで書かれたこの詩は、主として

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

れ死ぬという設定の類似性や、『猫』二章で、「クーパーの金魚を盗んだ猫」<sup>14</sup> (28)への言及があることから判断して、漱石がこの詩の存在を十分に知り、その着想をもとに滑稽なる猫の死を描いたのはまちがいなからう。とくにグレイの猫が「八度水中から浮かび上がる」(“Eight times emerging from the flood”)ほど長時間に渡ってもがき苦しむ過程は、漱石の猫の、下のような苦しみの描写にも生かされている。

もがけばがり〜と甕に爪があたるのみで、あたつた時は、少し浮く気味だが、すべれば忽ちぐうつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがり〜をやる。……遂にはもぐるために甕を搔くのか、搔く為にもぐるのか、自分でも分かりにくくなった。(567)

しかしながら「吾輩」は、しばらくもがいた後、冷静に状況判断をし、諦めの境地にいたって最後には安楽を得る。

次第に楽になつてくる。苦しいのだから難有いのだから見当がつかない。水の中に居るのだから、座敷の上に居るのだから判然しない。どこにどうしていても差支はない。只楽である。否楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉齏して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んで此太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏、々々々々々々。難有い々々々。(568)

グレイのオードにはまったく存在しない、この「楽」な水死の着想を漱石はど

---

英雄詩の形式と陳腐な内容とのコントラストにより諧謔とユーモアを生み出している。この詩と『猫』の関係については、飯島の論文を参照のこと。

<sup>14</sup> 岩波版の注によれば、漱石は「クーパー」としているが、単行本以降は「グレイ」に直された。「クーパーもグレイも十八世紀イギリスの代表的詩人であるために、漱石が混同したものと思われる」と説明されている(578)。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

こから得たのであろうか？ここでいったん『猫』の次作である『草枕』へと目を転じてみよう。『草枕』がオフィーリアの水死、女性の水死を主要なモチーフとすることはすでに述べたが、そのなかで漱石はとりわけ、死にゆく女性の安らぎにこだわり続ける。もちろん、漱石の想像力の源にあるのは、ミレーの絵の下敷きともなっている『ハムレット』劇のなかのオフィーリア水死の場面である。

*Queen.*            There is a willow grows aslant a brook  
                         That shows his hoary leaves in the glassy stream.  
                         Therewith fantastic garlands did she make  
                         Of crow-flowers, nettles, daisies, and long purples,  
                         That liberal shepherds give a grosser name,  
                         But our cold maids do dead men's fingers call them.  
                         There, on the pendent boughs her crownet weeds  
                         Clamb'ring to hang, an envious sliver broke,  
                         When down her weedy trophies and herself  
                         Fell in the weeping brook. Her clothes spread wide,  
                         And, mermaid-like awhile they bore her up,  
                         Which time she chanted snatches of old lauds,  
                         As one incapable of her own distress,  
                         Or like a creature native and indued  
                         Unto that element: but long it could not be  
                         Till that her garments, heavy with their drink,  
                         Pull'd the poor wretch from her melodious lay  
                         To muddy death. (4.7. 165-82)

苦しいはずなのに、苦しみを感じる様子もなく (“incapable of her own

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

distress”) 歌いながら沈んでゆくオフィーリアの姿を王妃が語り出す有名な台詞であるが、このイメージは『草枕』のなかに形をかえて反復されてゆく。小説序盤、通りがかりの茶屋で長良の乙女のことを聞いた画工は、その夢を見る。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乗つて、峠を越すと、いきなり、さゝだ男と、さゝべ男が飛び出して両方から引つ張る。女が急にオフエリヤになつて、柳の枝へ上つて、河の中を流れながら、うつくしい声で歌をうたふ。……女は苦しい様子もなく、笑ひながら、うたひながら、行末も知らず流れを下る。(30；下線は筆者による)

また画工は、温泉のなかで自分の体を湯に漂わせながら、ミレーの「オフエリヤ」の絵について考える。

何であんな不愉快な所を択んだものかと今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り画になるのだ。水に浮んだ儘、或は水に沈んだ儘、或は沈んだり浮んだりした儘、只其儘の姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。(86；下線は筆者による)

さらに旅館の美女・那美がとつぜん画工に「私が身を投げて浮いて居るところを——苦しんで浮いてるところぢやないんです——やす〜と往生して浮いて居るところを——綺麗な画にかいて下さい」(117；下線は筆者による)と依頼する場面もある。これほどまでに執拗に漱石が、『草枕』で水に浮かぶオフィーリア的女性の安らぎ・安楽にこだわることを念頭におけば、その直前の作である『猫』の結末に描かれる水死の安らぎには、すでにオフィーリアの死のイメージが重ねられていると考えるのが順当であろう。そして実際、シェイクスピアのオフィーリアの水死と猫のそれとを見比べてみると、まったく別物とも思われる二つの水死は、相似と対照の興味深い関係性を示しつつ、互いが互いを照

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

らし出す批評的視座を提供していることにも気づかされる。

まずは、安らかな水死という共通点がゆえにかえって引き立つ理性と狂気のコントラストに注目したい。「吾輩」は安楽な死を迎える前にまず、死ぬまいと必死にもがきながら、自らのおかれた状況——自分はおかしくすることによって何をしようとしているのか、その目的の達成可能性はいかほどか、甕の高さと自分の足の長さの差はどれくらいか——を冷静に分析し、そして「もうよそう。勝手にするがいい。がり〜はこれぎりご免蒙るよ」(568)と断念する。むしろリアリズムの観点からすれば、ありとあらゆる意味でありえない話ではあるが、猫自身が客観的な分析をおこない、それに基づき死を受け入れる根拠を論理的に説明する点において、きわめて理性的な死であるともいえよう。極限状態においてすら客観的観察と論理的分析から離れられない、徹底した批評精神のあり方のパロディとさえいえるかもしれない。

一方のオフィーリアはどうであろう。ガートルードの語りだすその死は、後の葬式場で司祭が用いる“doubtful”(5.1.220)という言葉に集約されるように、すべてが説明不足で謎に満ちている。彼女は意図的に身を投げたのか、本当にガートルードが語るように「花輪をかけようと小川に転落し」たのか、そして苦しいはずなのになぜ「自身の苦しみも感じることなく」「歌いながら沈んでゆく」のか…。痛々しいほどに美しく悲壮な、狂気のオフィーリアの謎に満ちた死は、散文的で理性的な猫の死と鮮やかなコントラストをなし、理性や論理よりも感覚や美に基づく異なった価値大系を体現するかのようだ。さらに、酔っ払って甕にはまったにもかかわらず、お浄土へ行くことが示唆される猫の仏教的な結末は、なんの落ち度もないまま運命に翻弄されて死んでゆくオフィーリアが、キリスト教的には救済されないという皮肉と悲しみを引き立てるようでもある。二つの死の表面的な類似性の裏に隠れた対比を目の当たりにするとき、猫の最期を描く漱石がオフィーリアの溺死を意識していなかったとは考えにくくなる。

それでは、このような水死を描く漱石は、十一章を満たしていた藤村の・ハ

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

ムレット的な哲学的煩悶や厭世観をすでに去り、オフィーリアの体現する審美的で女性的な死の世界へと関心を移していたのであろうか？ そうともいえない。というのも、そもそも「吾輩」がビールを飲んだのは、なんともいえぬ虚しさや厭世的な気分のためであり、彼の死にも自殺につながる要素が混ざっていることが仄めかされるからだ。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のぢいさんは欲でもう死んで居る。秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業で、生きてゐてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢いかも知れない。諸先生の説に従へば人間の運命は自殺に帰するさうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさ／＼して来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。(564)

ここにはまだハムレット的な厭世の響きが聞きとれる。実際のところ、この猫の死はハムレットの死とも興味深い相似を示す。とくに、死を境として饒舌と沈黙が切り替わるという点において、猫の死はハムレット的な死のパロディの様相をも呈するのだ。“Words, words, words”「言葉、言葉、言葉」(2.2.192)という台詞が象徴的に示すように、舞台上で心中の憤懣、懷疑、思索を露わにしつづける「おしゃべり王子」ハムレットは、“the rest is silence”「あとは沈黙」(5.2.363)と言い残して死んでゆく。一方の『猫』でも、「吾輩」をはじめ「太平の逸民」らがまくし立てる「饒舌の世界」(前田1991、94)から読者が解放されるのは、猫が命を絶つときである。王子と猫の死はいずれも、観客や読者を「言葉の氾濫」(前田1991、94)から解放してくれるものとして機能する。

一般的には、苦沙弥が漱石の自画像とされているが、それを観察し、批評したり茶化したりする猫にもまた漱石が自らを重ねていることは間違いない<sup>15</sup>。

15 飯島は、「吾輩」のことを「己れをも含めて一切のものを批判して止まない漱石の中の批評精神の願望を象徴化したもの」と総括する(186)。また伊豆も、漱石が「猫」に自己を仮託したのみならず、そこに「無力で孤独な自己」をも見出してたと論じ

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

ビールに酔って甕に落ち、溺れ死ぬという徹底的にばかげた死に方をする猫には、華厳の滝に身投げした藤村、生か死かと深刻に思い悩んだハムレット、そうしたハムレット的な自我をかかえて神経衰弱をわずらう漱石自身（つまり「吾輩」）もが重ね合わせられているのではないか。滑稽で散文的な猫の死を通して漱石は、自分をも含めた、青白く頭でっかちで自意識過剰の男たちを揶揄し、笑い飛ばそうとしながら、それと同時に、猫のように「死んで此太平を得る」ことを願っていたのかもしれない。いずれにせよ、次の『草枕』のモチーフになる水死が、もっぱら女性的で審美的なものへと変わってゆくのは、『猫』において漱石が、いったん男性と自殺の主題に終止符を打ったからなのではなからうか<sup>16</sup>。

## おわりに

『猫』におけるシェイクスピアと『ハムレット』への言及はただ一ヶ所——「セクスピアも千古万古セクスピアではつまらない。偶には股倉からハムレットを見て、君こりや駄目だよ位に云ふ者がないと、文界も進歩しないだろう」（269）——である。漱石が西洋文明や英文学に強い崇拜の念を抱き、後の作品にその影響を反映させたことはよく知られる。しかしその一方で、留学中の彼が西洋に対する劣等感や反英感情を募らせ、そうした負の感情からなかなか抜け出せなかったこともまた有名である。シェイクスピアの偉大さも『ハムレット』の文学的価値も嫌というほど知っていたはずの漱石であるが、それらから自分が受けた影響や恩恵、さらに、それらへの反応を創作分野でストレートに表明する気もなければ、そういう心境にもなかったのかもしれない。本稿で見てきたように『猫』執筆においても漱石は、あえて直接的な対峙や言及は避けて、当る（214）。

16 前田愛によれば、ミレーの絵は『草枕』に登場する画工および漱石の抱いていた「ある強迫観念」(1990、262)を表しているという。平岡敏夫は漱石のこだわりの背景に、熊本時代の妻鏡子水死未遂事件を指摘する（118-32）。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

時の社会や思想言論のなかに浮遊・沈殿している『ハムレット』/ハムレットをめぐる様々なイメージ、言説、観念などの断片を敏感にすくいあげ、それらを変形させたり、独自の皮肉や諷刺を加えたりしながら自作テキストに織り込んでいった。この世界文学の名作に平伏すのでもなく、真っ向から逆らうのでもなく、まさに「股倉から見」るかのように、異なるアングルから独自のアプローチを図ったといえよう。

※本研究は、2015年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「日本的『ハムレット』翻案作品の研究——〈書き換え〉のメカニズム研究」(代表 芦津かおり)の成果を反映している。

#### 引用文献

Bloom, Harold. *Shakespeare: Invention of the Human*. NY: Riverhead Books, 1998.

Gray, Thomas. "Ode on the Death of a Favourite Cat." *The Poems of Thomas Gray, William Collins, and Oliver Goldsmith*. Ed. Roger Lonsdale. London and Harlow: Longmans, Green and Co. Ltd, 1969.

Shakespeare, William. *Hamlet* (The Arden Shakespeare). Ed. Harold Jenkins. London: Methuen, 1982.

Takahashi, Yasunari. "Hamlet and the Anxiety of Modern Japan." *Shakespeare Survey* 48 (1996): 99-111.

姉崎正治「現時青年の苦悶について」『太陽』9巻9号(1903): 80-88。

安倍能成『我が生ひ立ち：自叙伝』岩波書店、1966。

飯島武久「漱石の猫とグレイの猫」『漱石作品論集成』第一巻(櫻楓社、1991)所収、181-87。

伊藤整『日本文壇史』7、講談社文芸文庫、1995。

越智治雄「猫の笑い、猫の狂気」『漱石作品論集成』第一巻所収、56-67。

坪内逍遙「自殺是非」『太陽』9巻9号(1903): 56-71。

「那珂博士の朔華巖の瀑に死す」『萬朝報』明治36年5月26日。

夏目漱石『吾輩は猫である』、『漱石全集』第1巻(岩波書店、1993)所収。

——『草枕』『漱石全集』第3巻(岩波書店、1994)所収。

——「文学論」『漱石全集』第14巻(岩波書店、1995)所収。

——「私の個人主義」『漱石全集』第16巻(岩波書店、1995)所収、581-615。

漱石の『ハムレット』受容—『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに

——「断片」『漱石全集』第19巻（岩波書店、1995）所収。

平岩昭三『藤村操 華厳の滝投身自殺事件』不二出版、2003。

平岡敏夫『漱石：ある佐幕派子女の物語』おうふう、2000。

平川祐弘『夏目漱石』講談社学術文庫、1991。

藤原正「嗚呼亡友藤村操君」『第一高等学校校友会雑誌』128号（1903）：74-83。

前田愛「世紀末と桃源郷——『草枕』をめぐる——」『漱石作品論集成』第二巻（桜楓社、1990）所収、260-68。

——「猫の言葉、猫の論理」『漱石作品論集成』第一巻所収、94-105。